

江戸中後期の人口増加と飢饉—出雲国神門郡 102 村

Population Increase and Famine in Edo Period Japan: Villages in Kando County, Izumo Province

廣嶋清志 (島根大学)

HIROSIMA, Kiyosi (Shimane University)

hirosima@soc.shimane-u.ac.jp

江戸後半1721(享保6)年～1846(弘化3)年における日本の14地域別人口増加率を見ると、山陰(23.6%)は最も高い四国(26.8%)に続き南九州(23.6%)と並ぶ高さであった(速水2009,p.30)。同時に、山陰は、人口性比(男人口/女人口×100)が1750(寛延3)年～1846年にかけて東海、近畿などに並んで低い水準(110弱)であり、また、わずかであるが、唯一上昇した地域であることが明らかにされている。本研究は、この山陰地域における人口性比の上昇をともなう人口増加を出雲国神門郡について解明をこころみる。神門郡は、島根県に1896(明治29)年まで存在した郡で、現在、簸川郡に含まれ、出雲国・松江藩の最西端、石見国に接する。人口は(62,124人, 1833年)で、出雲国(315,270人, 1834年)の約20%を占める。出雲国で宗門改帳はごく少数しか見つかっていないが、同郡(102村)については人口の記録が山本家文書などの文書に含まれ、18世紀半ばから19世紀前半にかけて80年近くの村別・時期別の男女別人口、家数などごく基本的な動向を研究できる。

これらの史料によると18世紀においては女の人口増加率が負か極めて小さいこと、また、1754年の村別の家あたり人数と人口性比と間には負の相関(-0.40)があることから、女兒のマビキの存在を推定し、また、その関係が1824年にはみられなくなったことから19世紀前半にかけてマビキの程度が緩和されたことを推定した。

神門郡の沿海、中間、山間の3地域別の人口性比を1863年の石見銀山嶺におけるものと対比させ、山間の人口性比の高さが出生性比によるものでなく、17歳以上の人口性比によることから、もっぱら女性の死亡率の高さによってもたらされていることを推定した。死亡率が相対的に高かった山間においてもその低下が進み、女性人口増加率が男のものより高くなることによって1830年代に人口性比が低下に転換したことを明らかにした。

神門郡人口の動向は18世紀半ばから19世紀前半までの84年間について、第1に18世紀後半の天明の飢饉を含む微増時期、第2に18世紀末から19世紀前半天保飢饉直前までの人口増の順調な時期、1837年の飢饉による急な減少の3期に分けられる。

第1期に人口は、1754(宝暦4)年,49,535人から1790年代の初め、1791(寛政3)年の51,048人まで37年間に1千数百人、年平均0.08%の微増であった。そこには天明の飢饉が影響したはずである。しかし、その後、18世紀末,1790年代から人口はほぼ直線的に増加し、19世紀前半、1837(天保8)年の62,975人まで50年間近く年0.4%程度の増加が続いた。つまり、19世紀初めから19世紀前半はまず順調な人口増加を経験した。しかし、この期の直後、1837年には天保の飢饉によってマイナス5%という目立った人口減少を経験する。

神門郡の村々を沿海、中間、山間の3地域別に分け、年平均人口増加率を見ると、第1期18世紀末年までの人口微増期は中間部が最も大きく0.11%で、沿海0.04%、山間0.03%の2倍以上である。しかし、18世紀末から19世紀にかけての第2期の人口増加期にはその大きさは沿海が0.85-0.58%できわめて大きく、中間部の0.38-0.21%と山間の0.36-0.51%を超える。18世紀半ばから19世紀前半までの全期間についてみると、結局、人口増加率は沿海0.37%、中間0.19%、山間0.17%の順であり、石見、出雲の他地域で確認されている人口増加率の地域差の研究結果に一致する。

第3期の天保飢饉期の年平均人口増加率は、全期間の人口増加とは逆に、沿海-8.26%、中間-4.42%、山間-3.70%の順で減少が大きく、沿海での人口減少の大きさが表れていて、

その人口増加の脆弱性を窺うことが出来る。

地域別に人口性比をみると、どの地域でも時代とともに1833年まで大きく上昇してきたが、1833年以後はすべての地域で低下に転じている。性別の人口増加率を地域別に見ると、第1期において沿海、山間で女の人口の増加率はマイナスであり、中間だけで0.09%と男の率と近いが、小さい。あとでみるように、郡外への流出が起こっていないとしてよいし、3地域間の移動もほとんどないといえるから、男人口の約0.1%増加と比べて沿海と山間は明らかに異常であるので、これは女兒中心にマビキ（墮胎、嬰兒殺し）が存在することを想定せざるをえない。

女の人口増加率は19世紀に入って一転して正に変化したが、男の人口増加率には及ばない。しかし、第2期後半1833-37年においてはどの地域でも女の人口増加率が初めて男のそれを上回り、その結果、人口性比の低下が始まった。19世紀前半に始まるこのような変化の要因は後で考察するが、出生、移動の要因よりもおそらく女性死亡率の低下によって説明されるだろう。この女の人口増加率の上昇は、沿海から中間、山間へ波及していったように見られ、1833-37年には山間部での女性人口の増加率がもっとも大きい。このような1833年以後の女の大きな人口増加率が注目される。この男女とも順調な人口増加は、社会増加はほとんど無いと考えてよいので、死亡率の低下によるものと考えられる。

神門郡における史料の最後の1838年における沿海、中間、山間3地域別人口性比(106.3, 105.1, 110.6)は、幕末(1863年)における石見銀山領の同様な地域区分別にみた人口性比107.4, 106.8, 110.7とほぼ同水準で、また順位も同様に山間地域の性比がもっとも高い(廣嶋2002, 表3)。したがって、石見と出雲という隣接する地域においてこのような人口性比の水準とその地域差を生むような人口が動くしくみ(人口機構)をかなり共通するものと考えられる。

銀山領の年齢別人口を見ると、16歳以下では山間地域の性比102.4は沿海106.3, 中間105.9よりむしろ低く、17歳以上においてその人口全体の性比の高さが生じていることがわかる。したがって、山間の人口全体の性比の高さは出生性比が影響して生じたものではないことがわかる。とすると、その性比の高さは17歳以上における女の死亡率の高さ、および転出率の高さ、おそらく結婚にともなう移動によるものと推測できる。実際、この銀山領の年齢別既婚率(廣嶋2002, 図8, 図9)を見ると、37-51歳において、山間地域が女性では最も既婚率が高く、男性は反対に既婚率が最も低い。たとえば、山間部では47-51歳における男の既婚率(85%)は女(93%)に比べかなり低く、他地域(沿岸90%, 90%; 中間92%, 85%)と大きく異なる。これは山間地域における女性の不足、男性の過剰を示していると思われる。

102村を3地域に分けて、(1)天明飢饉期1754-91年人口増加率の相関係数をみると、直後1791-1833年人口増加率と山間のみで-0.45の逆相関で克服する動きがみられ、1837-38年天保飢饉とは0.59と逆に類似する増加率が現れる。これに対して、沿海では直後期との相関は0.00であり、天保飢饉期とは-0.57で、逆の増加率が現れている。つまり、山間では2つの飢饉の現れ方に共通性があるが、沿海では、2つの飢饉について逆の傾向が現れている。一方、この飢饉期の人口増加率は、全期1754-1838年の増加率と意外にも沿海、中間、山間とも共通して相関が大きく(0.92, 0.82, 0.85)、この地域のこの84年間の人口増加率は、その前半、天明飢饉期によって大方が決められているともいえる。

(2)天保飢饉後期1837-38年の人口増加率は、1754-1838年全期の増加率と、沿海、中間、山間でそれぞれ-0.64, 0.05, 0.39の相関で、沿海で逆相関-0.64であることが特徴的である。これは沿海で全期の人口増加率の大きかった村でこの飢饉による人口減が大きかったことを意味し、山間では逆に天保飢饉は全期の増加率の縮約的な再現に近い順相関0.39となっている。

【文献】廣嶋清志2002「幕末石見天領の人口機構—単年次宗門改帳による観察」『経済科学論集』(島根大学)第28号:1-28.

同2016「人口の男性化と増加—近世後半の出雲国神門郡にみる」『山陰研究』No.9, 19-36..